



坂口安吾 加田伶太郎 集
久生十蘭 戸板康二 集

日本推理小説大系 10 東都書房

日本推理小説大系第10卷

坂口安吾 久生十蘭 加田伶太郎 戸板康二集
定価三八〇円

著者 坂口安吾 久生十蘭
加田伶太郎 戸板康二
発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社
発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九
電話 東京(九四一)三二一一
振替 東京 七二七三二
落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三五年一月二〇日第一刷

目次

坂口安吾

不連続殺人事件 5

能面の秘密 104

久生十蘭

金狼 119

湖畔 176

ハムレット 191

黒い手帳 209

加田伶太郎

眠りの誘惑 223

完全犯罪 241

戸板康二

車引殺人事件 261

団十郎切腹事件 271

解説 中島河太郎 285

坂口安吾

不連続殺人事件

1 俗悪千万な人間関係

昭和二十二年六月の終りであった。私は歌川一馬の呼びだしをうけて日本橋のツボ平という小料理屋で落ちあった。ツボ平の主人、坪田平吉は以前歌川家の料理人で、その内儀テルヨさんは女中をしていた。一馬の親父の歌川多門という人は、まことに我ままな好色漢で、妾はある、芸者遊びもするくせに、女中にも手をつける。テルヨさんは渋皮のむけた可愛い顔立だからむろん例外ではなく、その代りツボ平と結婚させてくれた時には小料理屋の資金も与えてくれたのである。一馬の東京の邸宅は戦災でやられたから、彼は上京のたびツボ平へ泊る。「実はね、だしぬけに突飛なお願いだが、僕のうちに一夏暮してもらいたいのだ」

一馬の家は汽車を降りて、山路を六里ほどバ

スにのり、バスを降りてからも一里近く歩かなければならないという不便きわまる山中なのである。そんなところだから、私たち数名の文士仲間、戦争中彼の家へ疎開していた。ひとつには彼の家が酒造家で、酒がのめるといふ狙いの筋もあったのである。

「わけを話さないで分ってもらえないが、この月の始めに望月王仁の奴がふらりとやってきた。すると丹後弓彦と内海明がつづいてやって来たのだ。妹の珠緒の奴が誘いの手紙をだしたからで一夏うちへ泊るといふ。君だから恥を打掛けてお話するが、珠緒の奴、この春、墮胎したのだ。相手が誰ということは全然喋らないから今もって分らないが、ひと月のうち半分ぐらいいはフラリと上京してどこかに泊ってくるのだが、手のつけようがなくなっていたのだ。御承知の通り望月王仁という奴は、粗暴、傲慢無礼、鼻持ちならぬ奴だが、丹後弓彦の奴がうわべはイギリス型の紳士みたいに鄭重で取り澄ましているけれども、こいつが又傲慢、ウヌボレだけで出来上ったような奴で、陰險なヒネクレ者でね。内海明だけは気持のスッキリしたところがあるけれども、例のセムシで姿が醜怪だから、差引なんにもならない。三人もつれて喧嘩ばかりしていやがる。珠緒の奴はそれが面白くて誘いをかけた仕事なんだよ。僕らはやりきれやしない。からんだり、睨みあったり、セムシの奴なんぞは時々立腹して食卓の皿を床に叩きつけたりね、一人の姿を見ると一人がブイと立

去るといふ工合で、僕らのイライラ不愉快にすることと云ったら、まったくもうゆっくり本を読むような心の落着きが持てないのだね。そこで誰言うとなく、いっそ昔の顔ぶれ、戦争中疎開に来ていた顔ぶれだね、一堂に会して一夏過そうじゃないか、東京は飲食店が休業だから丁度よからう、なんてことになった。彼らもそれを望んでいるが、僕らも実は助かる。彼らは退屈まぎらしのつもりだけれども、僕らは奴らだけじゃ息苦しくって、ほかに息ぬきのできる人たち、木ベエにしろ小六にしろ、いてくれた方が助かる。まぎれる。別して君には是非とも来てもらいたいのだ。木ベエも小六も来ることになつて、実はあさつて一緒に出発することになつてゐるんだがね」

「宇津木さんもか」

「むろん一緒だ。胡蝶さんもくる。その為に一夏舞台を休む事にした程だから」

女流作家宇津木秋子は今はフランス文学者の三宅木兵衛と一緒にいるが、もとは一馬の奥さんだった。もともと話し合いの上で別れたことで、文学者同士のことだから、あとは綺麗なものだけれども、問題は一馬じゃなくて、望月王仁だ。疎開中、当時一馬夫人だった宇津木秋子と木兵衛と話がすすんで、終戦、東京へ引上げるといふ時に話し合いの上で一馬が離婚を承諾した。一馬も元々秋子にてこずり、殆ど未練はなかったのである。

秋子は非常に多情な女だ。疎開中は木兵衛よ

りも王仁と交渉が深かったのだが、王仁の奴が全然貞節の念をもたない奴で珠緒とも関係があり、女中だの村の娘だの八方に情痴沙汰、秋子なんぞは食後の果物、オヤツ程度にし心か得ていないから、秋子もあきらめて、木兵衛と一緒にになった。然し内心は相当王仁に参っている。王仁は天下の流行作家であるし、傲慢無礼、粗雑、野性的なところが肉感派の秋子に魅力なのだろう。秋子は本能の人形みたいな女で、抑制などのできなくなる痴呆的なところがあるから、山莊へ行く、王仁とそのままでは済まない筈だが、木兵衛という奴、理知聰明、学者然、乙にすまして、くだらぬ女に惚れてひきずり廻されて、唯々諸々というのだが、そのくせ嫉妬で胸が破れそうなことも云っている。一馬の招きに応ずるなどとは全くバカげた奴だ。

私は然し、この招待は、なるほど一馬の述べたような理由によるものと思うけれども、一馬自身がこの計画に乗氣の理由の最大のものは別に隠されているのだらうと思つた。狙いはむろん胡蝶さんにあるのだらう。胡蝶さんがよびたいのだ、私はそう思う。

明石胡蝶は劇作家人見小六の奥さんで、女優だ。満身色氣、情欲をそる肉感に充ちているが、胡蝶さんは王仁のような粗暴な野性派が嫌いで、理知派の弱々しい男が好き、人見小六などはネチネチ執拗で煮えきらなくて小心臆病、根は親切で人なつこいタチなのだが、つきあいにくい男だ。胡蝶さんは一馬が好きで、一馬の

方が積極的に出さえすれば小六を捨てて一馬に走るぐらいの氣持はいだいている。

あの頃は然し一馬は臆病だった。宇津木秋子は三宅木兵衛と共に去る。元々未練のない女とはいえ置き去られては心中暗澹、疎開客は終戦と共ににわか去り、小六も胡蝶さんも去った。彼は孤独というものが何よりも自分の望む愛人のように、あの時はむしろ敵しい勇氣にみちて、一同を見送り、孤独に閉じこもつたように見えた。

ひと月ふた月に一度ぐらゐづつ上京のたびに、世相の変転は彼の心に大きく影響して、去年の春ごろだが、今の奥さんのあやかさんに会つた。あやかさんは女学生のころは詩などを作つていたそうで、主知派の異才歌川一馬といへば文学少女には相当魅力のある中堅詩人だから、そのころ三四度お友達と訪問したりしたことがある。然し詩はあやかさんには附焼刃で、實際は詩などに縁もゆかりもない人だ。だから女学校を卒業すると、もう一馬を訪れはしなかつた。

去年再会したときに、あやかさんは土居光一という画家と同棲していた。彼の絵は最もエニツクだと云われ、鬼才などともてはやされているが、私はそうは思わない。シュルレアリスム式の構図にもっぱら官能的な煽情一方のものをぬたくり燃えあがらせる。ちよつと見ると官能的と同時に何か陰鬱な詩情をたたえている趣きのあるのがミソで、然し實際は孤独とか虚無

の厳しさは何一つない。彼はただ実に巧みな商人で、時代の嗜好に合わせて色をぬたくり、それらしい物をでっちあげる名人だ。だから絵自体の創作態度も商品的だが、又、売込みの名人で、終戦後は画家の苦境時代だが、彼は雑誌社や文士に渡りをつけて、挿絵の方で荒稼ぎ、相変らず鬼才だのユニツクな作風などと巧みにもてはやされている。

一馬は別人のようだった。色々抑えていたものが、時代の変転、彼に発散の糸口を与えたのか、オレだって女房を寝とられていたんだ、何かそんな居直り方のアンパイで、全くもう女に亭主のあることなど眼中にない執拗さ、ひたむき、食い下つたものである。

尤も、あやかさんは美しい。飛び切りという感じがある。あやかとはうまい名をつけたもので、遊び好きで、くつたぐない。しかしシツコイことが嫌いなようで、一馬の執念深さ、柄に合わない居直り方にシカメッ面を見せる氣配も見受けられたが、こういう人を天来の娼婦型とでもいうのか、つまり貧乏が何より厭なのだ。土居光一は画家の中では挿絵をかいたりして収入のある方だが、この物価高ではタカの知れた収入で、一足の絹靴下も買ってもらえない。一馬の方は元来が大金満家の御曹司のところへ、時局的にも酒造家であり、数十万町歩の山林は持つている、イヤでも闇の大金がころがりとむ、上京のたびに金庫からチョツと一つかみ札束つかんでくる、一つかみぐらい減つたっ

て減ったあとと分りやしないが、鼻紙みたいに
掴んでくる札束が七八万円はあるという、下々
には見当もつかない景気で、遊ぶこと、おし
い食べもの、美しい着物、豪奢の好きなあや
さんはお金に惚れてしまった。アツサリ土居光
一に引導を渡して、正式に一馬と結婚した。そ
れが去年の晩秋ごろであった。

尤も商才にぬかりのない土居光一のこと
で、即座に一馬と膝づめの商談、女郎だつてミウケ
の三万や五万は今時かかるんだから二十万円で
ミウケしろという。私が間に立って十万に値
切つて出たが、十五万円でケリをつけた。

なアに、あの女はオレでなきゃだめなんだ
よ。俺の肉体でなきゃアね。オレの肉体は君、
ヨーロッパの娼婦でも卒倒するぐらい喜ぶん
だから。吹けば飛ぶような三文詩人じゃない
か。まもなくオレのところへ涙を流して、あや
まって、帰ってくらあ。

土居光一は私にそう言った。然し、自信満々
の和製ドンファン先生もこいつはダメだろう。
あやかさんという人は一人の男ぐらい屁とも
思っていないので、世界中の男が、つまり自分
のよりどり随意の品物に見えるというような薬
天家じゃないかと私は思う。

土居光一がミウケ代と称して二十万円を請求
した時には大いに誇りを傷つけられて、まった
くこういう楽天的な麗人は男なんか屁とも思わ
ぬくせに、小さなことでひどく誇りを傷つけら
れ無性腹を立て、ゲキリン、復讐、復讐もしな

かったけれども、大変な剣幕で怒ったもので、
ひどい喧嘩別れをしたという話であった。

そのことを私が言うとう、土居光一はゲラゲラ
笑つて、バカな、喧嘩なんて、男同士だつて結
局仲直りのチャンスじゃないか、男と女の喧嘩
なんて、他人同士なら元々喧嘩なんかやしな
いや。ひどい喧嘩別れをしたというのは、ひど
く仲良しになる条件があるということなんだ。
わかつたかい。彼は自信、ウヌボレの化身で
あった。

もとより土居光一の予想は外れて、あやかさ
んはもはや彼には一顧にも及ばなかったが、然
し一馬も決して幸福な結婚ではなかったよう
だ。尤も別に浮気をするというような事ではな
い。あやかさんは、衣の下から身体の光りが輝
いたという衣通姫の類で、全身の輝くような
美しさ、水々しさ、そのくせこんなに美しく
色っぽく見える人は御当人は案外情欲的なこと
には無関心、冷淡、興味がすくないのか、浮気
なところは少い。ただ上京のたびに豪奢きわま
る買物をして、大喜び、お気に入り衣裳や靴
ができてくると、喜び極まり第一夜はその衣裳
をつけ靴をはいて寝てしまうというテイタラ
ク、まったく定跡のない人物なのである。

万事につけてひどく愛くるしいから、クレオ
パトラのようなツンとした女王性は微塵もない
けれども、わがままであり、人の心をシンシャ
クしない。女房の義務など考えていないから、
亭主へのサービスなどは思ったこともなく、し

たがって、亭主が何をしても平氣の平左という
様子、これが一馬には物足りない。自分一人を
特別の男として特別に見てくれる風がないか
ら、ノレンに腕押し力負けで、物足りなかつ
たり、不安であつたり、無念であつたり、それ
で恨みを述べると、あべこべに立腹されてしま
うから、一馬先生顔色を失ひ、このところ全く
圧倒されて、男一匹、わが身の拙なさ、だらし
なさ、それとなく懊惱、叛逆の色も深い。

実際はあやか夫人に惚れすぎているからのこ
とであるが、こうなると、浮気みたいなものが
してみたいような氣持になるもので、私は疎開
愚レン隊を一夏招待、これはどうも胡蝶夫人が
狙いの筋ではないかと思つた。彼のような坊っ
ちゃんには人に好かれるのが嬉しくて、それを知
らぬふり、そんな様子をしてみるのが好きなの
だ。特に人の奥さんが亭主よりもひそかに自分
を思ってくれるというようなことを確めて、そ
れとなく素知らぬ素振りですの愛情を弄びい
たずらするのが愉しいので、それは趣味上のこ
と、浮気というようなものではなくて、自ら飛
びこんで口説くことなどできやしない。する氣
もない。するほど惚れていやしないのだ。

そういうタチの一馬が、自分がはからずもあ
やか夫人に惚れてふり廻されるハメに立ち至つ
たから、ふり廻されるという外部の形式が感覚
的に残念無念で、私には彼のそういう心理はよ
く分るのである。だから充ち足らざる部分を胡
蝶夫人を招待して、ひそかにその愛に甘え、む

しる胡蝶夫人の純愛を弄び虐待し、そんな気持があるのだ、本当はあやかさんに惚れているのだ、ウツカリすると取り返しのつかないことになる。私はそんな風に考えた。

然しいくら坊ちゃんとは云え、年齢四十、立派な文学者で詩人のやること、魔に魅いられても十字架は自分自身で負いきるべき御仁のこと、私がそれを気にやむまでのことはない。

私は然し私一個の私事として、この招待には応じ得ぬ理由がある。なるほど、望月王仁という無法者が乗りこんでいる。そこへ丹後弓彦という取り澄したヒネクレ者と内海明という陽気なセムシが乗りこんで、からみ合い、睨み合い、すね合っていたんじゃ、外にお化けの一連隊でも呼びたくなるのは尤もであるが、古い腐った蜘蛛の巣みたいなものがネトリからみ合った男と女を一堂に集めて、その陰鬱陰惨なつながり、からみ合い、思っても不快、悪趣味、厭じやないか。そこに私が加わると、尚更いけない理由があった。

私の女房の京子は、一馬の親父の歌川多門の妾であった。妾や手カケの数あるうちで、特別寵愛のこもった女で、だから戦争中、まさか自宅へ入れるわけには行かないから（當時は梶子夫人がまだ存命であった）、自分の村の一軒をかりて疎開させた。私は京子と恋におちて、終戦と共に強奪して、東京へ引揚げてきたのである。

多門の怒りは狂暴なもので、風の便りにもいっかな余憤おさまらず、あいにく又、大臣級

の政治家で、これからオレの天下と大いに希望のあったところを、でもなく追放になる、すっかり苛々、私がつまりその苛々の分まで憎まれ役に廻っていたようなものである。然し去年の夏、梶子夫人が死に、まもなく下枝という村の相当の家の娘に目をつけて、無理に小間使いに、つまり侍女、妾、それで御機嫌が直ったそう、追放後の閑のからだを今では十九の小娘を寵愛して鼻の下を延しているという話であった。

「モクベエや小六と違って、僕がまさか君の家へ行ける筈がないじゃないか。御尊父の御機嫌がいくらかまぎれているにしても、僕はそれいくらかでも不快な思いを好んで見たくはないからな。僕はともかく、京子は身ぶるいするだろう。それは出来ない相談だね」

「然しね、まア、もうちょッと我慢して、きいて欲しい。君にだけは、すべてを打ちあけてお話しするつもりなのだから。僕の精神上の極めて鬱陶気的なお話しもあるし、それから、いささか通俗的な犯罪実話もある」

彼はポケットから一枚の封書をとりました。「見てごらん。こんなイタズラをしかける奴があるんだ」

ごく有りふれたレターペーパーに、次のように書いてある。

お梶さまは誰に殺されたか。
すべては一週忌に終るであらう。
憎しみも呪いも悲しみも怒りも。

巧い字じゃない。然し手蹟を隠して書いた字だろう。安物のインクを使い、シミがたくさんできている。スタンプによる発信地は、近くの町で、東京から行けば、その町で汽車を降りることになる。彼の家は更にそこから六里ほどバスで山径を走らねばならぬ。然しともかくこの田舎町は彼の村から最も近い都会であり、村人の買ひ物は概ねこの町を利用し、間に合わせる。

「これは然し、ハイカラな文章じゃないか。ハイカラ以上に、文学的だな」

「この手紙は僕に宛てたもので、犯人を誰とも書いてないけれども、僕に宛てたところをみると、僕を犯人に当てているのかも知れないね。御承知の通り、うちの母は二度目の母で、僕の母が死んだ後お嫁にきて、だから年も僕と三つしか違わない、去年八月九日に四十二で死んだのだ。然し僕がこの母を殺す何の理由があるだろう。この母は元々ゼンソク持ちだった。心臓ゼンソクという奴だ。それが怖いものだから、海老塚というピッコの医者、これは落魄した遠縁の子弟だが、これに学費を給与して内科を学ばせ、五年ほど前、村へ住居を与えて開業させた。山中の無医村で開業するには内科だけじゃいけないので、外科も耳鼻科も眼科も、齒科まで一手に兼ねなければならぬから、父などはあまり早くよびよせるのは反対で、全科にわたって一応習得させる時間を与える方が村のためだと云うのを、いいえ、私のためによぶ医

者ですから、と云って、卒業後研究室に一年ぐらいたただけで強制的によびよせた。医者の当人が学究肌だから、それが非常に不服であったほどで、こつちへ来てから表面従順ではあったが、ソリが合わなかった。恩を忘れて不親切だと云って、母は医者を怒っていたが、逃げられると困るので、不満があるのも堪えていたようだ。ゼンソクという奴はひどい苦しみ方だから、腹這いにタタミをむしる。まったく母はタタミをむしりながら苦しみ死にを遂げたもので、何本注射をしてもダメだった。これは心臓ゼンソクの普通のことで、特別どうということはない。然し苦悶の様相のうちのたぶん極限のものだろうから、ここへたとえば毒殺という外からの手段が加えられても見分けはつかない。外に出血とか死斑とか、そういうことは別として、苦悶の様相だけでは、ね。然し、出血も死斑も特別なものは何もなく、死んでからは安らかな顔で、もとより毒殺などとは誰一人考えた者もなく、葬ったのだ。そんな噂が私たちの耳にとどいたのは今年になってからだろう。臨終には女中から出入りの者まで集っていたのだから、苦悶の様子を見ている。山中の暇な村人だから尾ヒレがついて、そんな話になったのだろうが、ほっともおけないから海老塚医師に聞きだしたら、大きな目玉をむいたきり、返事もなかった。あれはそういう人物で、分りきったことには返事をしないタチなのだ。ビッコで、そういう不具のヒガミからきたような偏屈

なところがあって、お喋り嫌いの人づきの悪い男だ。そのうち、食事に家族が集つてゐる時、珠緒の奴がふいに私に向つて、近頃村じやアお兄さんがうちのお母さんを毒殺したんだなんて噂があるそうよ、と大きな声で言いやがった。むしろんこれは冗談だ。あいつはそういう人の悪いイタズラをしたがる奴なんだ。人の一番いやがることをね。あいつときたら、あいつはお梔お母さんのたつた一人の実子のくせに母親が死んだって悲しむどころか、全く涙ひとつ、こぼしやしないんだから。叱る人がいなくなつて、これで大ッピラに大いに遊べるとハリキッたような始末なのだ。然し、あいつにしたつて、こゝと、いやしくも殺人犯だから、そうバカな冗談も言わないので、実は当時、別に犯人は誰それだというまことしやかな風聞があった。君達も知っている諸井もろいという看護婦、あれのことだ。変に色ッポイ女だからな。たしかに父と関係はあった。君がお京さんとあゝなつて後は別して相当の交情があったことも事実だろう。それで母を殺して後釜を狙つたという、これは如何にも村の噂に手頃の一派悲劇の人間関係じゃないか。農村の噂なんて、みんなこれぐらゐ月並なものさ、こんな噂があるから、妹の奴、安心してあんなひどい冗談を言いやがった。むしろん誰もゾツとなんかしやしない、凄味なんか、ないからね、ゲタゲタみんな笑いだした。然し、僕自身は、やっぱり寝さめは悪い」

諸井琴路もろいことしという看護婦は今ほたぶん、ちやう

ど三十前後だろう。だいたい女、若い女というのは英雄愛好家だから、戦争ともなればただの娘も看護婦になつて従軍するぐらゐの夢は見がちのもので、看護婦ならみんな戦地へ志願しそうな鼻息のものが、この諸井という女は別で、凡そ架空な夢の少ない、冷めたい女であつた。男の冗談などには取りあひもしない。五尺四寸五分だとか、日本の女に珍しい延び延びして均斉のとれた見事な体格で、顔もまづくはない。漁色漢の望月王仁は、あゝいう女はムツツリ助平と云つて、冷めたく取り澄しているくせに内心は淫らなものだ、案外ウブなもので変に情熱があつて一晩はよろしいものだ、などと大いに働きかけたが、全然手ごたえがなかった。戦争になつて看護婦というものが戦地へ駆り立てられてひどく貴重品になつたとき、東京のかかりつけの病院にいたこの看護婦が戦地へ徴用されちゃイヤだなどこぼしていたので、無医村の看護婦という立派な口実に許可を得て連れてきて、海老塚医院へおかず、自宅の一室を与えて屋だけ医院へ通わせる。自分の都合もあるけれども、外にも名目があつてこの家には外に二組の病人があつた。

一つはここへ疎開の南雲一松なぐもいつとという老人がこゝへ来てから中風で寝ついている。一松の妻女はお由良婆さまとよばれ、歌川多門の実の妹だ。この人も半病人で、生来の虚弱からヒステリーの気味で、お梔さまとは特別折合いが悪い。多門という人は特に肉親の情愛などはない

けれども、世間並のことならなんでも鵜呑みに
 気にかけないタチだから、妹一家が疎開する、
 よからう、面倒みてやれ、病氣になった、よか
 ろう、手当をしてやれ、それだけのことで、大
 きな家で金も物資もあり、自分の邪魔になると
 ころは何一つないから、ちつとも氣にかけな
 い。そんな人間共が寄食していることも忘れて
 いる。けれども女はそうはいかない。別してお
 梶さまは後妻で、多門の子供みたいな年で、昔
 から反目していたから一緒に住むと巧くいか
 ない。

お由良婆さまの子供は男一人女四人だが、男
 は技術家で外地へ行っており、この戦争に潜水
 艦で死んだそうだが、女は二人死んで、一人は
 嫁に行つて満鉄にいる。末娘だけが未婚で、一
 緒に疎開しているのだが、お梶さまの娘の珠緒
 さんと、この千草さんが大猿たならず仲が悪
 い。珠緒さんは美人だが千草さんは以ての外
 の不美人で、目がヤブニラミでソバカスだらけ、
 豚のように肥っている。肥っているのに神経質
 で意地悪でひねくれており、ヒガミが強いから、
 奔放な珠緒さんの意味のないことまで悪意
 にとつて恨んでいるから、珠緒さんは腹に物を
 たためておけないタチでガラガラビシヤビシヤ
 やつつける。これが又、母親同士の反目の種に
 なるのである。お梶さまは和歌など物して短歌
 雑誌に投稿している人だから、オットリ奥さま
 然としているけれども、病的に潔癖な神経が
 あつて、嫌いだすと百倍嫌になるようだつ

た。

もう一人の病人は加代子さん。これが大いに
 問題の人だ。この人の母親は死んでいる。お祖
 父さん、お祖母さんは歌川家の飼ひ殺しの下男
 と女中頭で、喜作爺さん、お伝婆さん、どちら
 も人の好い、いつもニコニコ、大へん感じのよ
 い召使いだ。

加代子さんは言うまでもなくこの二人の老人
 の孫だけれども、実は多門の落しダネで、女中
 の母親が身ごもり生み落した娘だ。だから召使
 いの部屋の一つに在るけれども、女中の手伝い
 をするわけでもなく、服装なども華美ではない
 が、小ざっぱりした都会風のを当てがわれ
 ている。この娘がまことに美しい。清楚、純
 潔、透きとおるように冴え澄んだ美しさだ。

けれども十七の年から肺病で、女学校の四年
 の時、寄宿舎で発病して一時入院したが、退院
 後は女中部屋の一室で、寝たり起きたり、たい
 がい読書をしている。

珠緒さんよりも二つ年上、珠緒さんが二十二
 なら、加代子さんは二十四、千草さんはその二
 つ年上で、二十六になっているだろう。

この隠し子の存在にはお梶さまも相当煩悶し
 た由であるが、自分の結婚前ということが、と
 もかく納得の手蔓ではあったらしい。私はよく
 知らないが、母親の女中さんはお梶さまが来て
 から首をくくつて死んだとか、そういうことが
 あつて、お梶さまの加代子への呪いは下火に
 なつたのだそうだ。この病氣には食物が大切に

からと特別の滋養物なども心がけてやり、服装
 なども人前へ出て恥しくないものを心がけると
 いう風で、諸井看護婦にも、お加代には氣をつ
 けて、と言ひ含めたそうだ。

だから加代子さんに微熱があると看護婦を病
 院へやらず、附添わせる。南雲一松爺さんやお
 由良婆さまが相当の変調でも、いいから病院へ
 行ってきなさい、忙しいでしょう、と言う。諸
 井看護婦が又、冷めたい女で、俗な情愛の稀薄
 な人だから、愚痴っぽくメソメソとヒステリー
 じみた南雲一族が嫌いで、よく面倒見てやらな
 い、その呪いがお梶さまに集り凝つていたわけ
 だ。

お梶さまは危篤の時、死の直前のもはや畳を
 むしる苦悶の力すらも衰えかけたとき、みんな
 居る？ そうきいた。そしてそれらの言葉は殆
 どよく聞きとることが不可能だったが、南雲一
 家の者はあつちへ行つてくれという意味のこと
 を言つたようであつた。然しそれは明確に聞き
 とることができなかったので、お梶さまの枕も
 とに一番近く坐つていた珠緒さんも、実際はど
 う言つたのか、分りやしないわ、と言つている
 そうである。

「この脅迫状は全くバカげたものさ。こっちは
 身に覚えがないことだから、手紙の文句の方
 は、僕は氣にかけていない。村の疎開者かなん
 か、暇で、ヒネクレた奴のイタズラだろうよ。
 僕が君をたよりにしているのは、これは僕のあ
 まりひどい我ままだけれども、君よりも実のと

ころは、どうしてもお京さんが必要なんで」
酒の酔いもさめたように、彼の顔色は青ざめてきた。

「余分の注釈はよしにして、いきなり言ってしまうが、僕は昔から、加代子を熱愛していた。然し、ともかく兄と妹なんだから、僕は色情的なものを、極めて精神的に変形し、いたわり、聖母を敬慕するような、そんな風なやさしい心をもっていたのだ。困ったことに、加代子の方が僕以上に僕を愛していたんだね。その上に、君、あれぐらい毎日何かしら読書しているくせに、非常識な話だけれども、兄の僕を恋人として愛している、兄と妹は恋をしちゃいけないのだと言っけてきかせても、どうして？ 世間の人がそうだって、どうして私達がそうでなければならぬいの？ 向う見ずだよ。世間なんか、もう眼中に入れたくないのだね。それが処女の生一本の情熱で思い決しているのだから、僕は打たれた。死んでもいいと思った。崇高そのものですよ。君は信じられないかね。これ以上の崇高はないですよ。なんと云ったって、君、加代子は世間を捨てているんだから。罪を知らないのじゃないのだ。加代子は聰明そのもの。なんでも知っている。神のように知っている。見抜いているのだ。自分の宿命だつて見抜いているさ。僕はふらふらした。ねえ、そうだろう。もし神様にやさしくだかれて悪事をささやかれたら、いったい人はどうなると思う。僕は然し危いところで思いとどまった。からだにふ

れてはならぬ。たとえ死んでも。僕は神様を犯せない。いや、然し、犯さずにいられそうもない気がする。加代子は僕の手を握りしめた。僕たちは接吻した。冷めたい悲しい接吻だった。二人はまるで水のようにただ一つのものであったと言う事ができる。崇峻そのものであった。悲痛そのものだったよ。加代子は言うのだ。結婚しよう。神様は必ず許してくれる。そして、死にましよう、とね。僕は然し死ねない。僕はそんなに単純じゃない。僕は悪党なんだ」

一馬の言葉は痙攣的な叫びになった。然し僕が生来のアチャラカ・ボーイで、一向感動しないから、だんだん動物園の猛獣みたいにおとなしくなつて、

「僕は然し、實際悪党だから」

「そりゃ分っている。君ぐらいの年になりゃ誰だつて悪党だ。あやか夫人にもソッコン参りすぎている。胡蝶さんにだつて、時には口説いてもみないだろうし、さ。加代子さんは君以外の男は眼中にありやしないから。然し、そりゃ、崇高でもなんでもなく、案外近親相姦でもなく、みんな君自身が幻覚している雰囲気で、根は処女の魅力、魔力、それだけじゃないかな。根をつきとめると、実は案外、薄ッぺらなものさ。怒ったかね。そうじゃないか。君は實際はあやか夫人の非処女性に圧倒され徹底的に降伏状態にあるんで、ちつとはムホン気も出したいから。兄と妹、恋愛、大いによろしい。多少

はムホン気もだした方がいいさ。発散すりゃ、それでいいんだ。然し実のところ、ほんとにヤッちゃったのかと思つて、話の中途じゃちよッと冷や冷やしたね」

「そんな風に言ってくれと、僕も救われるがね。君の言葉が当たっているとは思わないが、理窟は止そう。理窟は僕一人だけ信じてりゃいいんだ。君から、そうやって、いたわって貰えれば。僕としては本望なんだから。それで君にお願いというのは、加代子には友達というのが一人もない。たった一人、お京さんの外には。加代子は毎日お京さんを思いだして、懐かしんでいるのだよ。病気に悪いことを知りながら、一里の山道を歩いて、よくお京さんのところへ遊びに行ったものだから。叱られても、又、行く。熱をだして寝ついても、起きられるようになると又でかける。脱出して、でかけるのだから。僕はあのころ、お京さんが加代子を殺す妖婆に見えて、憎んだものだよ。だから君、お京さんに来てもらつて、加代子の氣持をなだめて貰えぬものだろうか。そういう役割を果し得る人といつたら、お京さんの外には金リザイないのだから。僕がいかに意氣地がなくて申しにくいものだけれども、僕のことをもう諦めて、外に心をまぎらすように仕向けて貰いたいのだ。勿論、僕自身からも、そう仕向ける。然し僕の全力で足りそうもないから、お京さんに助太刀を頼むのだ」

困った役目だ。もとより私の一存で返事ので

きることじゃない。

戻って京子に言ったら、マッピラ御免だと言う。恋の病いは草津の湯でもと言うから、誰の匙加減でもダメ、当事者にまかせ、成行にまかせることだ。加代子さんが自殺でもすりゃ、こっちの寝ざめが悪いばかりだ。それに京子の立場としては、あの山荘へ再び顔を出したくないのは当然だった。

京子の決意が右の如くであるから、一馬も諦め、三日の後にモクベエと小六の両夫妻を同道して山へ帰った。

2 意外な奴ばかり

七月十日の朝であったが、一馬から次のような手紙がとどいた。

七月十五日にツーリストビュロオから切符を届けさせるから、その日の終列車で来てくれ。ぜひとも頼む。尚、三枚の切符のうち一枚は巨勢博士のものだから、口説き落して、ムリムタイにでも同道たのむ。三拝九拜。

怖るべき犯罪が行われようとしている。多くの人々の血が。君と巨勢博士だけが頼みだ。そして、お京さん。お京さん！ たのみます。待ってます。暗い血の海が見える。

十五日の午後、実際にツーリストビュロオの使いの人が三枚の切符を持ってきて、N町行きの終列車は二十三時三十五分だから、N町へ翌朝七時ごろつき、バスの始発にレンラクすることができると云う。

一馬はツーリストビュロオの嘱託なのである。宣伝文化の企画に参与するのだそうだ。

一馬は時々生一本に思いこんで凄むから、私はどうも、つきあいにくい。私は然し、至ってツキアイのいい方だから、何かというホダされて、どうもいけないタチである。京子は始め厭がったけれども、文面が凄すぎる。それよりも、女は要するにスミレ詩人で、崇高なる近親相姦、そういうところに所詮ホロリとしているのだ。じゃア思いきって行きます、というので、文面の示すところに従い巨勢博士を訪れた。

巨勢博士と云っても、実際は博士でもなんでもない。それどころか私や一馬に比べると十一年も若のまだ二十九という若僧なのである。

彼は十七の時、まだ中学生であったが、私のところへ文士になりたいと称して弟子入りにやってきた。僕みたいなカケダシの若僧に弟子入りしたって仕様がな、大家のところへ行きなさい、と言ったら、若い者は若い者同士でさア、と変なことを言やがった。

然しまでもなく彼は探偵に凝りだして、然し大学では美学というシャレたものを勉強したが、これはつまり奴が不勉強で、ほかの科へ入学不

可能な宿命を自覚したからの結果なのである。然し彼の探偵の才能は驚異的なものだった。まさしく天才である。我々はイヤというほど実例を見せられ、全くどうも奴の観察の確実さ、人間心理のニュアンスを微細に突きとめ嗅ぎ分けること、怖ろしい時がある。彼にかかると、

犯罪をめぐる人間心理がハッキリまぎれもない姿をとって描きだされてしまう。全てがハッキリ割切られて、計算されて、答がでてくるのだが、それがどういう算式によるのか、変幻自在、奴の用いる公式が我々には呑みこめない。我々文学者にとっては人間は不可決なもの、人間の心理の迷路は永遠に無限の錯雑に終るべきもので、だから文学も在りうるのだが、奴にとつての人間の心は常にハッキリ割り切られる。

「それくらい人間が分りながら、君は又、どうしてあも小説がヘタクソなんだろうな」と冷やかしてやると、

「アッハッハ。小説がヘタクソだから、犯罪が分るんでさア」

こいつはシャレや御謙遜ではないだろう。この言葉もまた真理を射抜いた卓説で、彼の人間観察は犯罪心理という低い線で停止して、その線から先の無限の迷路へさまようことがないように、組み立てられているらしい。そういうことが天才なのである。

だから奴は文学は書けない。文学には人間観察の一定の限界線はないから、奴は探偵の天才

だが、全然文学のオンチなのである。

然し我々は彼の探偵手腕を絶対的に認めるから、この不勉強の怠け者を敢て博士と尊称することにしているが、然し奴めは肩のこる学問は知らない代りに、下らぬものなら、講釈本、落語全集等の高級品から下は猥本、映画雑誌、相撲の番付、そういうものは徹夜で耽読するから、下らぬものならなんでも知らぬというものがない。

私が出かけて行って手紙を見せて応援をたのむと、

「そうですか、避暑はいいな。料理も食えるし、酒ものめるか。然し、今晚はダメですよ」

「なぜ」

「つらいな、開き直られちゃ。ちょッとお耳を拝借。ア・イ・ビ・キ。分りましたか」

「博士もまた然りか。どうせ相手はパンパンだろう」

「やいちゃ、ヤボです。先生。明日の夜行で行きます。一足お先きに。あの子もつれて行きたいな」

「つれて来たまえ、遠慮なく」

「ダメ、ダメ。神聖なる処女は虎狼の中へ連れて行くわけに行かないです」

「博士は少女趣味かい。やれやれ。俺はトシマ趣味の奴に憑かれてるんだ」

私は手紙の指定通り出発した。

汽車はこの節としては大名旅行で、腰かけることができず、眠ることができず、便所へ行く

ことができない程度の穏やかな旅行であった。

N町へ降りると、思いがけない人物が乗り合わせていたのだ。私は呼びかけられて驚いたが、神山東洋とその奥さんの木曾乃さんだ。

神山夫妻は戦争中、ちょッとばかり山へ顔を見せたことがあるが、弁護士だ、八九年前までは歌川多門の秘書をやっていた男だ。木曾乃は元は新橋の芸者で、落籍されて多門の妾であったが、東洋と密通し、そのことから秘書をやめたが、時々訪ねてくるのだそう。弁護士という頭腦的な商売どころか暴力団のような見るからガッシリ腕ッ節の強そうな大男で、歌川家ではみんなに毛嫌いされて出てゆけがしに扱われ、どっちを向いても、女中にまで渋い顔を見せつけられ、誰に話しかけても、誰も返事もしないのである。

「これはお京さんも。そうそう、矢代先生と御結婚の由、承っていましたよ。先生も見かけによらない。そうなんだな、文士なんて、おとなしそうで、やっぱりその道は猛者ぞろいなんだな。恐れ入りました。今後よろしく御指南願いますよ」

私は返事もしなかったが、

「矢代先生も歌川さんでしょう。お伴いたしましょう」

「あなたも歌川さんですか」

「ハア、何ですか、招待状が参りましたもんでね。珍らしいことがあるものですよ」

然しバスに乗りこむと、私は呆れ返って、ウ

ンザリした。厭な奴、思いがけない奴にばかり出っくわす。土居光一が乗っている。ヤア。彼は当り前というように、頭をガクンと挨拶したが、前へ下げずに、後へ上げるのだから、人をバカにした奴だ。

「ヤア、君はどこへ行くのだい」

「どこへ行くって、こんな安達ヶ原に毛のはえたようなところへ来て、どこへ行きようもないじゃないか。歌川一馬のうちへ行くにきまつているさ。君はそうじゃないのか」

こいつが然し、何の用で行くのだろう。

「君は何か用があるのか」

「バカにするな。あんなヘッポコ詩人に何の用があるものか。ミウケの金はちゃんと貰ってしまつたから、とくに飲みほしてしまつたけれども、後をネダルほど零落はしないよ。奴がぜひとも御光来、一夏をお過し下され、酒も料理もあるというが、変なことを言ってくる呆れたオッチョコチョイだと思ったが、酒があるなら、つきあつてもよろしかろうじゃないか」

彼は京子を見て、フンと笑って、

「あなたがお京さんか。なるほど美人だ。色ッぽいな。淑徳厚く、又、浮気心も深しか。いい色気だなア。残念だ。二足三足おくれたわい。オレが戦争中この村へ疎開してりや、お京さんはオレが抱いてあげたんだがな。然しお揃いで堂々と歌川家へ乗りこむなんざア、矢代文士も御心臓じゃないか。君の小説は子供っぽくて読めないがな」

いったい一馬は何を考え、何を企んでいるのだらうか。私は彼の手紙からは主としてナンセンスを感じただけだが、今や私もひどく不安になってきた。何かが起る。少くとも、何かが企んでいることは、もはや確実と見てよかつた。

バスを降りると若い下男が荷物を運びに待っていた。まだここから一里近く山の小径を上ったり下ったり、疲れた時にはやりきれない道中である。

ようやく歌川家の近く、鎮守様の下へさしかかったとき、木蔭から二人の女が私たちの方へ歩いてきた。あやかさんと宇津木秋子であった。私たちを迎えに来た様子であった。

然し、あやか夫人は私たちに近づくとも棒のように直立してしまった。何がなんだか、わけが分らないという顔で、自分の目を疑ぐるような風であったが、それを見ると土居光一の方が先に声をかけた。

「よう、大富豪令夫人。御出迎え、御苦労。どれ、お駄賃に、オレが久々に可愛がつてあげるかな」

彼はツカツカとあやかさんの方へ歩いて行った。それは全く抱きしめ接吻ぐらいしようという氣勢であった。

「何しに來たの？ あなたは？」

あやかさんはジリジリ宇津木さんのうしろへ、身を隠すように退いたが、光一はそんなことは意ともせず、なんなら二人の女と一緒に抱

いてしまふぐらいの調子で、

「ヤア今日は。あなたは、どなた？ え？ 宇津木秋子さん。あ、高名な女流作家、お見せしました。まだ若いんだな。これは美しい。いずれ、ゆっくり御挨拶します。昔の色女が待ちかねていますからね」

光一はあやかさんの腕をつかんだ。あやかさんは激しく振りはらって五六歩逃げて、

「悪党！ ろくでなし！ お前なんかの來るところじゃない。帰んなさい。ねえ、誰か……」

私たちの方をウロウロ見たが、又光一がシャニムニつかみかろうとするので、言葉をつづける暇もなく、顔色を失って、逃げだした。その後姿に目もくれず、光一はハンケチをだして額の汗をふいて、

「いとしい人に出っくわすと、女の子はとりのぼせるよ。どうして女という奴は、待ちこがれた人に、待ちこがれたと言えないのかなア。ねえ宇津木さん、日本の女は色ごとの訓練が足りないからね、そうでしょう」

歌川家へつくと、来客諸公は滝ッポへ水浴にかけた由で、一馬とセムシの内海だけが私たちの到着を待っていた。

私は喋る力もない。一風呂あびると、ビールとサンドウィッチの中食をとり、目がとろとろ開かなくなつて、部屋へ寢床をしいてもらつて、寝こんでしまった。都会の暑熱に喘ぐ身に山の冷気は快適で、私が目をさましたときは、もう、たそがれていた。私の期待に一つ足りないものがあつた。まだヒグラシが鳴かないのだ。月末には、鳴きだすだらう。顔を洗っていると、女中が迎えに來た。そこへ京子も迎えにきて、

「ようやく、お目ざめ。もう、みなさん、お酒めしあがつてるわ」

「まったくグッスリねむったものだな」

私は大きなアクビをして、階下へ降りた。

3 招かれざる客

私は望月王仁が大の嫌いであつた。尤も文壇で望月王仁が好きだという者はめつたにない。才筆を鼻にかけて人を人とも思わない。礼儀作法を弁えず、人の面前で婦人に接吻はおろか、暴行強姦もやりかねない奴で、だから未だに独身で、天下の女はみんな俺の女のようなものだとうそふいている。

けれども彼はジャーナリストに人望がある。

それは奴が金ッばなれがよいことと、ジャーナリズムは思想性よりも筆力で評価するから、彼の才筆に眩惑される。それにジャーナリズムは事物を歴史的 성격で判断せず、現実の現象性で判断するから、彼が第一級の流行作家であることから彼の傲慢は当然とうけられ、却つて自信があるとか、あれだけ信念がなきや芸術はできないなどと、逆に彼の傲慢が美德の如くに評価される始末、好色癖などはむしろそれが天才の証拠のように、さすがに一般と神経が違ふなど